



News Letter

No. 5 July 2005

21st Century COE Program

Center for Evolutionary Cognitive Sciences at The University of Tokyo

言語学と進化論と



池内 正幸
(津田塾大学)

言語の起源と進化の研究は、いわゆる「文科系」と理科系を横断する最近の学際的研究の一典型例ということになるのであろう。前者は生成言語学を指し、後者は進化生物学・進化論を指すとしよう。成果を出しつつあるもののまだ両者が充分うまく噛み合っていないとしたら、一般的に言われる学際的研究の難しさに加えてさらに何か理由があるのかも知れない。生成文法理論研究はやはり反証主義の方法論を採ることでここまで来たのだと思う。それに対して、進化論の仮説は、ネオ・ダーウィニズムにせよ、ゲールド流にせよ、(筆者が理解する限りでは)全称命題になっておらず、反証不可能な形になっていると思う。この辺りが上で触れた理由の1つなのだろうと思う。そこで、筆者は、まだ成熟に至っていないこの言語の起源・進化という学際領域では、もちろん反証可能な仮説が提出できるならそうすべきであるが、この際、しばらくの間、あえて帰納法を採って確証例を集積していくというのでもいいのではないかと思い始めている。これが協同研究をより単純化し、活発にするのではないかと思う。ある程度進んだところで厳密に形式化すれば良いのではないかと思うのである。これは、言ってみれば、言語学が進化論に歩み寄ることを意味している。

もちろん、お互いの分野の関連する妥当な成果をできる限り理解し、尊重することが大事であることは言うまでもない。つまり、進化論研究者には、『ミニマリスト・プログラム』か、それに相当する程度の概論・入門書は押えておいて欲しい。一方、言語学者は、『種の起源』や、全体としてはマイナーであると言われるが、ゲールド達の著作—もちろん、Gould (2002) までとは言わないけれども—は確認しておくべきであろう。この点、一部の若手の研究者の態度に一抹の不安を感じる部分があるのは筆者だけではないと思う。

そうであれば、言語学者にとっても、「ホモ・サピエンスのアフリカ出発は6万年以上前」(朝日新聞夕刊05/05/24)とか、「ヒトの「創造性」は約7万5千年前に現れた」(同05/06/03)のような記事も他人事ではなくなるはずである。言語学者が「開かれれば」、言語学も「開かれた分野」になるだろうか。

ともあれ、筆者が以前から指摘しているように、この種の学際的研究には「常設」の適切な学際的研究集団が必須である。このCOEプログラムはその主旨に相応しい研究組織に近いのではないだろうか。さらなる成果に期待したいと思う。

Contents

言語学と進化論と	1
新しい研究動向—こんな研究をはじめました!	2
若手研究発表支援—海外発表を終えて	3
研究者紹介(その5)	4
本プログラムの教育活動	5
プログラムの近況(2005年4月~6月)	6
これまでの活動報告	7

新しい研究動向—こんな研究をはじめました!

濱崎 裕子(本COE・特任研究員)

サルとヒトは、どこが違うのだろうか？ なぜヒトは言葉を話すようになったのであろうか？ なぜヒトの脳はこれほど大きいのか？ 科学がこれだけ進んだ現在でさえまだまだ説明できないことがたくさんある。

脳は、数百億以上の神経細胞や、その周りに存在するグリア細胞などから構成されており、その神経細胞により形成される神経ネットワークによって、記憶、学習、行動などの脳の高次機能が実現されている。"脳死"がヒトの死であるかどうかはさておき、ヒトにとって脳の活動が大変重要な役割を果たしていることは間違いない。意識するしないにかかわらず、寝ているときでさえ、ヒトの行動は全て脳によって支配されている。"脳"は、生命活動においてこれほど重要な役割を果たしているにもかかわらず、まだまだ解明されていないことが多く、その機能を理解するためには、分子レベルから組織レベルにいたるまで幅広い視点からの解析が必要である。

そこで、この重要かつ特殊な脳を、分子生物学的観点から探ってみようというのが、私の研究である。すなわち、サルとヒトで脳がどのように違うのか、脳の部位による差異があるのか、年齢による差はあるのか、などを、脳の素材であるたんぱく質にスポットを当てて検討していこうと考えている。

ヒトの脳を使用するのは倫理的に不可能なので、ヒトに近いサル類の脳を研究材料とする予定である。とはいえ、サル類の脳サンプルも手軽に入手できるわけではない。そのため、分析に必要なサンプルの収集と、少量のサンプルで、最大限の情報を得ることができる実験系の選択が重要となる。そこで、私は、たんぱく質の発現量の変化を、二次元電気泳動を用いたプロテオミックディファレンシャルディスプレイ法によって網羅的に解析することにした(図1)。

プロテオミックディファレンシャルディスプレイ法

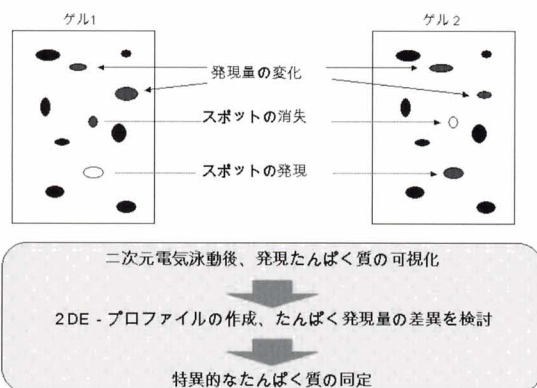
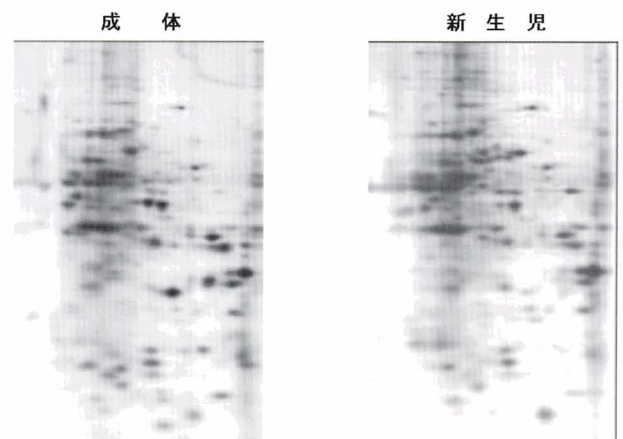


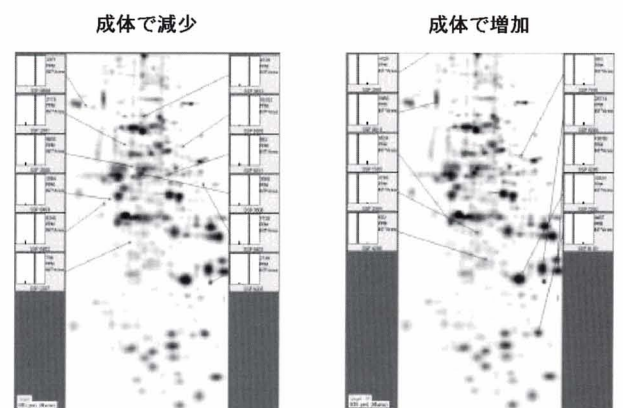
図1

現在は、脳で発現しているたんぱく質が、年齢(発達)によってどう変わるのかについて検討するため、凍結保存された成体カニクイザルの脳組織およびサル新生児の脳組織を材料として用いて、それぞれの発現たんぱく質の特異性を網羅的に解析している(図2,3)。それぞれのサンプルから得られた発現たんぱく質のプロファイルと比較、検討することにより、発達に関連していると思われる特異的なたんぱく質を同定していく予定である。さらに、同定したたんぱく質の機能を解析することにより、その特性、発達における役割などを明らかにしていきたい。



カニクイザル脳蛋白 2次元電気泳動像

図2



カニクイザル脳の発達における発現蛋白量の比較

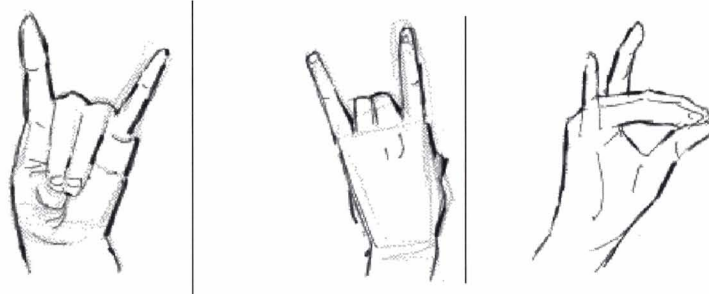
図3

若手研究発表支援

海外発表を終えて

國平 搖 (総合文化研究科・博士課程1年)

今回参加したInternational Meeting for Autism Research (IMFAR) は自閉症研究者が一堂に会する国際会議であり、今年は2005年5月5-7日にボストンにて開催された。本会議は今年で4年目であり、年々規模が拡大されている。私の参加は今年が2度目であった。発表は "Children with autism imitate handshape, but not hand direction." というタイトルでポスター発表を行い、自閉症児は手の形(例えばきつねの形)の模倣は問題なくできる一方、そのきつねが前向きか後ろ向きか横向きかといった向きの情報に関しては注意が向かない(=模倣できない)傾向が健常よりも高いことを報告した。従来より自閉症児は幼少期から模倣が「できない」あるいは「苦手である」ことが指摘されており、それが自閉症児の他者認知や社会性の障害にも影響しているのではないかと考えられてきた。ただし模倣と社会性の発達との関連については現段階ではまだ実証的な研究はなく、これからは単に「模倣能力がある／ない」ではなく「模倣のこういった側面が難しいのか、または難しくはないのか」といった模倣のメカニズムにまで踏み込んで検討していく必要がある。その点について議論を行い、さまざまな研究者よりコメント、今後の課題についての示唆、臨床から見た感想などを得ることができた。会議全体に関しては、遺伝や脳神経科学、臨床介入、家族研究、早期診断など、自閉症に関するものといってもそのアプローチは多岐に渡り、現在行われている自閉症研究についての最先端の動向に触れることができた。自閉症という複雑な病理を解明し、かつその成果を臨床現場や家族に還元していく上でもさまざまなアプローチが必要であることを再認識させられた。



まねしてもらった課題の例

片岡 麻衣 (総合文化研究科・修士課程1年)

2005年6月1日から6日まで、アメリカ、テキサス州のオースティンで開催された人間行動進化学会(Human Behavior and Evolution Society Meeting 2005)に参加し、ポスター発表を行う機会を得た。私の発表は"Male and Female Brain on Judgments and Cognition"というタイトルで、質問紙で測定されたパーソナリティの性差・個人差が、社会的な場面での判断や認知とどのように関連しているかを考察したものである。具体的には、「心の理論研究」で有名なバロン＝コーエン教授が開発した、他者と共感する能力(emphasizing)と外界の事象をシステム化する能力(systemizing)の性差、およびこれら2つの能力と推論課題、道徳判断課題との相関を検討した。同じ質問紙を用いた研究を行っているアメリカの研究者と出会い、互いの調査結果を比較しながら議論できたことは、非常に有意義であり、良い刺激になった。私にとっては初めての海外学会だったが、多岐に渡るテーマについて、主に欧米の研究者による最新の研究に接し、視野を広げることができた。特に、性ホルモンや性周期についての研究発表を多く見聞きし、性差研究において進化的・生物学的背景を考えることの重要性を感じた。それらを今後の研究のヒントにしたい。

研究者紹介（その5）

矢田部 修一（統合言語科学部門）

研究内容を一言でまとめると？

自然言語における意味計算のあり方を明らかにすることを最終目標とする研究を行なっています。生成文法と呼ばれる分野に属する、言わば言語自体に関する研究ですが、言語を人間の脳がどのように処理しているかという問題に関する心理学的研究や、人間の言語をコンピュータに扱わせることを目指す工学的な研究にとっての理論的な基盤ともなるものです。



COEでは主にどのような研究を行っていますか？

コンパクション駆動意味合成理論という、統語構造ではなく韻律構造に基づいて意味合成を行う理論の妥当性を検証することを目的として、以下のような研究を行なっています。まず、第一に、コンパクション駆動意味合成理論を検証する際の重要な検討領域となる、種々の等位接続構造に関して、主幹駆動句構造文法(HPSG)の枠組みに基づく包括的な理論を構築するための研究です。この研究はほぼ完了しており、既に、each-conjunct agreementとでも呼ぶべき現象その他、他理論においては妥当な記述が行なわれていない現象も含めて、過不足なく説明できるとされる理論を提示しました。第二に、やはりHPSGの枠組みの中で、Minimal Recursion Semanticsの手法を用いて、焦点化に関する理論を構築しようとしています。統語的構成素を成さない単語列であっても、韻律的構成素であるならば一つの焦点として解釈されることがありうる、という予測をする理論を提案する論文を書いて、その論文の中で、その予測が正しいと考えられる理由を述べたのですが、その予測の正しさを十分に証明するには至っていないので、現在、それをきちんと証明するための研究を行なっています。

西村 義樹（心理言語科学部門）

研究内容を一言でまとめると？

認知言語学という理論の立場から自然言語の文法(特に統語論)の意味的な基盤を明らかにすることを目標とする研究を行っています。この理論は言語の使用を可能にする知識(文法的な知識を含む)は人間の認知(心の仕組み)の他の部分と密接不可分に結びついていると考えているので、人間の心や脳に関する心理学・生理学的研究や心の進化についての研究などにも貢献できることが期待されます。

COEでは主にどのような研究を行っていますか？

文法の意味的基盤の研究の一環として、比喩の一種である換喩(メトニミー)が文法の中で果たしている役割を明らかにすることを目指しています。近年の認知言語学における研究によって、換喩は(1)日常言語に遍在する現象であること、(2)言語の知識に特有でない人間の一般的かつ基本的な心の働きや能力の反映であること、(3)従来他の理論で純粋に形式的な(意味から自律した)規則や原理によって説明されてきたものを含む多様な文法現象の根底にあること、などがわかってきました。この研究では、これらの成果を十分に踏まえた上で、換喩(的現象)をより包括的かつ明確に特徴づけることによって、従来別々に扱われてきたいくつかの文法現象(与格交替、所格交替、tough構文、迷惑受身、結果構文、等)を統一的な視点から捉え直すことを目標としています。その過程で、(1)百科事典的な意味論、(2)図と地の反転、焦点化等の)捉え方(construal)が言語表現の意味の成立に決定的に関わっていること、(3)使用基盤(usage-based)モデル、などの認知言語学の中心的な考え方が妥当であることも確認したいと考えています。



丹野 義彦（認知発達臨床科学部門）

研究内容を一言でまとめると？

異常心理学・臨床心理学です。精神病理がなぜ発生するのか、どう治療したらよいか研究しています。抑うつ・不安障害・統合失調症(妄想的観念、自我障害)など臨床場面や日常場面でよくみられる精神病理を対象としています。とくに「認知」というプロセスを重視した認知行動療法に注目し、発生メカニズムの検討や発生の予測と予防の研究をしています。

COEでは主にどのような研究を行っていますか？

進化心理学の立場から精神病理の発生や予防を考えます。精神病理は人間のネガティブな部分ですが、なぜ人間の進化の過程で生き残ってきたかを考えると、それなりの進化的な意義があるからです。例えば、抑うつは、病的な場合は自殺へと発展してしましますが、弱い抑うつであれば、休息をとったり、物事の見方を現実的にしたりといった適応的な面もあります。不安も、強い場合は恐怖症や強迫性障害などへと発展しますが、弱い不安であれば、行動が慎重になったり、来るべき危険を避けたりする適応的機能があります。3大精神病理(抑うつ・不安障害・統合失調症)それぞれで、ポジティブな適応的意義を考察し、それを面接法や質問紙法で確かめ、そうした理解がどのように予防や治療に生かせるかを考えています。精神病理は適応的な面もあるので、それを除去してしまうのは危険です。むしろ、精神病理に対する認知の仕方を変えて、精神病理をうまくコントロールしながら共存していくのが最良でしょう。こうした立場に近いのが認知行動療法という治療法ですので、この治療法の基礎的なメカニズムを実証的に研究していきたいと思っています。また、進化の考え方を生かして、精神病理のネガティブな側面を、どのようにしたらポジティブな側面に変えられるか、そうしたメンタルな訓練方法を考えています。



本プログラムの教育活動

テーマ講義「心とことば：言語の視座」(2005年度夏学期)

昨年度同様、本COEは駒場の教養学部集まっている1・2年生に向けた入門授業を開講している。今年度は「言語」を軸にした最前線の研究成果に触れてもらうことを目的としている。この原稿を執筆する段階では、第10回の講義、坂井克之氏の「ことばの音と意味、その脳内メカニズム」が終わったところである。

40人の受講者のうち、4分の1強が理系、残りが文系で、2年生が1年生よりやや多いという構成である。毎回の質問時間(10～20分)とリアクション・ペーパーから判断すると、本講義は、受講者を驚かせ、知的好奇心を刺激するところが少なくないようである。

イントロでは、長谷川氏(拠点リーダー)が活発になってきている言語起源論をめぐる最近の話題を紹介した。この連続講義でも、「言語学の外」の分野(遺伝学、脳科学、人類学)の研究者が言語の起源、「脳」による言語制御、非文字・言語コミュニケーションなどについて、どのようなアプローチをとるかを聞く場が設けられた。一般に、進化人類学・認知科学・遺伝学などの分野において行われる言語の起源・進化に関する提言に対して、言語学の分野から行われるレスポンスは必ずしも積極的なものではない(言語学とほかの領域の共同研究の困難については、池内正幸氏が本ニュースレターの巻頭言で提案する打開策を参照されたい)。本講義の範囲では、言語学分野からの提言が直ちに理想的な形で言語の起源・進化の問題の解決につながるとは限らないが、分野間の「対話」を行うための「通路」をいくつも探っている姿は見せることができたように思う。本講義では特に、進化のことを考えるときに核心となるにもかかわらず、中等教育の段階では軽視されがちな「音声・話しことば」の側面を重視する構成を取った。音の体系を仕切るルールはどう探索するのか(⑦)、同じ音が、異なる言語を母語とする話者には異なる音に聞こえてしまうのはなぜか(⑨)、文章ではなく会話のデータから文法を考えると何が見えてくるのか(⑥)。⑨と⑤では言語学の課題と心理学の実験法を組み合わせる研究が紹介された。例えば今井氏は名詞の文法的カテゴリー(数、助数詞など)が事物の認識にどう影響するか、あるいは影響しないかという「古典的な」課題を、最新の実験データを紹介しながら取り上げた。認知科学の中心的課題の一つである空間認知(行く・来る)の言語化を取り上げて、諸言語に共通の部分と言語ごとに異なる部分を分析する研究も紹介された(④)。次回の中島氏の講義で、進化と言語学理論をより直接的に結びつけるアプローチが紹介されることになっている。

かくて受講者の目の前に、それぞれの学問分野の手法を用いることによって見えてくる「言語」の多数の側面、言語の理解へのいくつかの道筋が展開された。示されたデータが何を語るか(その分野の定説ないし講師の主張)だけでなく、それに到るまでのデータをいかにして集め、処理するかについても受講者が強い関心を持ってくれたことも喜ばしい限りである。(ラマール・クリスティーン、統合言語科学部門・2005年度テーマ講義コーディネータ)

各講義の講師と題目

- ① 4/11 長谷川 寿一(拠点リーダー)「イントロ：言語起源論をめぐる最近の話題」
- ② 4/18 齋藤 成也(国立遺伝学研究所・集団遺伝研究部門)「言語能力の遺伝的基礎」
- ③ 4/25 船曳 建夫(超域文化)「ことばへの文化人類学からのアプローチ」
- ④ 5/9 中澤 恒子(言語情報)「指示表現の多様性と普遍性」
- ⑤ 5/16 今井 むつみ(慶應義塾大学環境情報学部)「認識の言語普遍性と言語相対性」
- ⑥ 5/23 藤井 聖子(言語情報)「話しことばの談話データを使った文法研究」
- ⑦ 5/30 田中 伸一(言語情報)「音に関する文法知識」
- ⑧ 6/6 Christopher TANCREDI(言語情報)「How to build meanings from structures」
- ⑨ 6/13 広瀬友紀(言語情報)「音声知覚に関する言語間比較検討」
- ⑩ 6/20 坂井克之(医学系研究科、認知・言語神経科学)「ことばの音と意味、その脳内メカニズム」
- ⑪ 6/27 中島平三(学習院大学文学部)「ことばの構造と脳活動」
- ⑫ 7/4 Christine LAMARRE(言語情報)「言語の変化：機能語の誕生と発展」

プログラムの近況

(2005年4月～6月)

本COEプログラムも3年度目に入り、折り返し点が近づいてきた。事業推進担当者、PD、院生のそれぞれが、最終目標を再確認しながら研究活動を進めるこの頃である。5月に行われた中間評価のヒアリングでは、複数の評価委員の方々から融合研究の姿が具体的に見えてこない、との厳しいコメントを頂いた。拠点リーダーからは、メンバー全員に対してこのような外部評価の意見があることを直ちに伝え、各メンバーが従来型の研究を越えて、隣接領域との交流をさらに推し進めていくことを再確認した。

さて、今年度からのメンバーとして、心理言語学を専門とする広瀬友紀さんと精神物理学を専門とする村上郁也さんの若い二人が加わった。両氏とも総合文化研究科の新任教員であるが、国際経験が豊富で、それぞれの領域で多くの業績を持っており、拠点形成の新戦力として、また若手研究者を直接引っ張る牽引役として活躍してもらえんことだろう。両氏の研究内容については、次号以降のニューズレターで紹介していきたい。

東京大学総合文化研究科は、学部教育では教養学部として全ての学生の教養教育にあたっている。本COEでは、新しい学問創成の息吹を学部生にも感じてもらうべく、昨年から各学期にシリーズ講義を開講してきた。今学期は、第3学期目にあたるが、学部の1・2年生を対象としたテーマ講義「心とことば:言語の視座」を開講中である。詳細については本号のラマール氏の紹介記事も参照頂きたい。

さらに若い次世代に対する学問への誘いとして、教養学部駒場博物館を舞台とした展覧会「錯覚展一心の働きにせまる不思議な世界」(会期:7月16日～9月18日)を鋭意準備中である。この展覧会には主に夏休み中の中高校生に来てもらい、錯覚という身近な体験を通して、心や脳の機能やメカニズムを考えて欲しいと思っている。もちろん、一般の皆様にも十分楽しんでいただける内容なので奮ってご来場いただきたい。会場等の情報は、総合文化研究科・教養学部のホームページ<http://www.c.u-tokyo.ac.jp/>でご確認下さい。

この4月より、若手研究者へのサポート事業として、国内外での研究発表を後押しする制度を設けた。その第一陣として、國平搖さんと片岡麻衣さんが渡米し、研究発表を行った。本号にはその参加報告の記事が掲載されている。

7月2日、3日両日には、国際ワークショップ「言語脳の探求」が開催された。昨年開催した「社会脳の探求」に続く、若手研究者が中心となって企画、運営した国際会議である。次号で詳細な報告があるはずだが、昨年と同様、若い力が炸裂するような国際研究集会になった。

(長谷川 寿一、拠点リーダー)

21st Century COE Program
Center for Evolutionary Cognitive Sciences at the University of Tokyo
Second International Workshop on Evolutionary Cognitive Sciences

In Pursuit of Language-Brain Interactions:
Language Acquisition, Sentence Processing and Neurolinguistics
July 2nd (Sat) - 3rd (Sun), 2005
Gakusa-Koryu Hall, Administration Office Bldg, 3F
The University of Tokyo, Komaba

Co-sponsored by:
The Tokyo University 21st Century COE Program in Humanities
Strategic Research and Education Center for an Integrated Approach
to Language, Brain and Cognition (<http://www.hrcf.jp/>)


Supported by:
Izumi Memorial Fund "Supporter for Academic Conference"

Invited Talks by:

- Peter Burkhardt (University of Bamberg / University of Marburg, Germany)
- Masako Hirotsani (Max Planck Institute for Human Cognitive and Brain Sciences, Germany)
- Elii Kaiser (University of Rochester, USA)
- Lulian Maroni (University of Maryland at College Park, USA)
- Etsuo Miyumoto (University of Tsukuba, Japan)
- Reiko Okabe (University of California, Los Angeles, USA)
- Koji Sagisaka (Waseda University, Japan)
- Kamil Ud-Dean (University of Hawaii at Manoa, USA)
- Matthew Waterson (Georgetown University, USA)
- Tessa Warren (University of Pittsburgh, USA)

& Poster Presentations

Admission Free


<http://ccs.c.u-tokyo.ac.jp/>
For pre-registration, contact yoshizumi@ccs.c.u-tokyo.ac.jp

活動報告

① COE研究発表会(事業推進者等の研究発表・討論会)

第27回 COE研究会 オープンラボにおけるPD発表会

日時：2005年6月3日(金)
 場所：17号館COEオフィス
 概要：総合文化研究科の広域科学専攻の研究室公開と合わせて研究室公開をおこない、PDの研究紹介のポスター発表をおこなった。

② COEシンポジウム・セミナー(共催のものも含む)

第24回：COE共催シンポジウム

「日韓対照研究会」
 日時：2005年3月16日(火)午後1:30～5:00
 場所：駒場キャンパス10号館301会議室
 担当：生越直樹
 招待講演：塚本秀樹(愛媛大学)
 「言語現象と文法化—日本語と朝鮮語の対照研究—」
 話題提供1：金智賢「韓国語の回想先語末語尾「-deo-」の現れた文の使用について」
 話題提供2：韓キョンア

第25回：COE主催国際ワークショップ
 (共催：東北大学21世紀COEプログラム
 「言語・認知総合科学戦略研究教育拠点」
 後援：一高記念基金「学術研究会支援」)

「言語脳の探求」
 日時：2005年7月2日(土)3日(日)
 場所：駒場キャンパス学際交流ホール
 担当：伊藤たかね
 8ページにプログラムを掲載

③ COE主催・共催研究会

第37回：COE共催研究会：東京音韻論研究会

日時：2005年2月20日(日)午後1:00
 会場：駒場キャンパス10号館301会議室
 担当：田中伸一
 発表者および発表題目：
 1. 小松雅彦(北海道医療大学)
 「コーパス音声学の試み(2) —MULTEXTの音響分析」
 2. 西村康平(東京大学大学院)
 「外来語におけるライマンの法則」

第38回：COE共催研究会：東京音韻論研究会

日時：2005年3月6日(日)午後2:00
 会場：駒場キャンパス10号館301会議室
 担当：田中伸一
 発表者：Julia C. Williams
 題目：Syllable feature analysis of American English

第39回：COE共催研究会：意味論研究会

日時：2005年3月25日(金)午後4:30
 場所：駒場キャンパス10号館301会議室
 担当：Christopher TANCREDI
 講演者：峯島宏次(慶應義塾大学)
 タイトル：Quantification and Indeterminate Pronouns

第40回：COE共催研究会：東京音韻論研究会

日時：2005年4月17日(日)午後1:00
 会場：駒場キャンパス10号館301会議室
 担当：田中伸一
 発表者および発表題目：
 藤村靖(International Institute for Advanced Studies)
 Syllable Reduction: Preliminary Remarks Based on the C/D Model

黒田成幸(UCSD)
 空気力学的射影素性幾何：韓国語響き音同化と日本語濁音化による試行

第41回：COE共催研究会：意味論研究会

日時：2005年4月22日(金)午後4:30
 場所：駒場キャンパス10号館301会議室
 担当：Christopher TANCREDI
 講演者：楠本紀代美(弘前学院大学)
 タイトル：How many UNTILs are there?

第42回：COE共催研究会：ミッチェル博士講演会

日時：2005年4月27日(水)午後1:00～3:00
 場所：駒場キャンパス2号館308室
 担当：丹野義彦
 講師：ピーター・ミッチェル(ノッティンガム大学発達心理学教授)
 題目：子どもは自分の心をどのように認知しているか?



第43回：COE共催研究会：東京音韻論研究会

日時：2005年5月15日(日)午後1:00
 会場：駒場キャンパス10号館301会議室
 担当：田中伸一
 発表者および発表題目：

1. Donna Erickson(岐阜市立女子短期大学)
 On phrasal organization and jaw opening
2. 佐々木冠(札幌学院大学)
 音便現象と韻律的単一性

第44回：COE主催講演会・デイビッド・プリマック講演会

日時：2005年5月17日(火)午後6:15
 場所：駒場キャンパス3号館113教室
 担当：長谷川寿一
 演者：David Premack
 タイトル：The hunter-gatherer, the church, and the state

第45回：COE共催研究会：意味論研究会

日時：2005年5月27日(金)午後4:30
 場所：駒場キャンパス18号館コラボレーションルーム3
 担当：Christopher TANCREDI
 講演者：Christopher TANCREDI
 タイトル：Predicate-Triggered Group Formation

第25回 COE主催国際ワークショップ「言語脳の探求」

共催：東北大学21世紀COEプログラム「言語・認知総合科学戦略研究教育拠点」

後援：一高記念基金「学術研究会支援」

言語研究のトピックや方法論は多岐にわたるが、このワークショップでは、獲得(acquisition)、文処理(sentence processing)、神経言語学(neurolinguistics)の3つの側面から、言語使用における人間の認知メカニズムを考える。国内外の気鋭の若手研究者にそれぞれの最新の研究成果を紹介いただき、様々な方法論やトピックを超えた議論を展開する。また、国内外の研究者の研究交流を目的としたポスターセッションも企画する。

July 2nd

10:30-10:40 Opening remark

10:40-12:10 Acquisition Session 1

Talk #1: Questions that Japanese children have in mind

Koji Sugisaki (Mie University, Japan)

Talk #2: The children's acquisition of causatives in Japanese: An experimental study

Reiko Okabe (University of California, Los Angeles, USA)

12:10-13:30 Lunch (& Poster Session)

13:30-15:00 Acquisition Session 2

Talk #3: The nature of language acquisition:

A genuine poverty of the stimulus

Kamil Ud Deen (University of Hawaii at Mānoa, USA)

Talk #4: Strong and weak determiners in child language

Luisa Meroni (University of Maryland at College Park, USA)

15:00-15:30 Coffee break

15:30-17:30 Poster Session

42 poster presentations

18:00- Social Meeting

Matthew Walenski (Georgetown University, USA)

Talk #2: On-line comprehension of Japanese passives and causatives: An ERP investigation

Masako Hirotani (Max Planck Institute for Human Cognitive and Brain Sciences, Germany)

Talk #3: Dependency and the syntax-discourse interface: Psycho- and neurolinguistic evidence from English and Dutch

Petra Burkhardt (University of Potsdam / University of Marburg, Germany)

12:15-13:30 Lunch

13:30-15:45 Processing Session

Talk #1: Scrambling and filler-gap dependencies

Edson Miyamoto (Tsukuba University, Japan)

Talk #2: Costs of building syntactic and referential representations: How linguistic structure building is constrained by processing limitations

Tessa Warren (University of Pittsburg, USA)

Talk #3: What factors influence reference resolution in representational noun phrases?

Elsi Kaiser (University of Rochester, USA)

15:45-16:00 Coffee break

16:00-17:00 Discussion

Discussant: Masatoshi Koizumi (Tohoku University) · Tetsuya Sano (Meiji Gakuin University)

17:00-17:10 Closing remark

July 3rd

10:00-12:15 Neurolinguistics Session

Talk #1: Fast grammatical computation in autism

東京大学 21世紀COE「心とことばー進化認知科学的展開」

〒153-8902 東京都目黒区駒場3丁目8番1号
東京大学駒場キャンパス17号館
TEL / FAX 03-5454-6709
ホームページ <http://ecs.c.u-tokyo.ac.jp>
発行日 2005年7月15日